



学校だより

令和8年度 5月号
横浜市立庄戸小学校

※学校だよりは「すぐる」でも配信しています

笑顔がかがやく 子どもが主役の学校

～感動いっぱい 夢いっぱい 一人ひとりのよさや可能性を引き出す教育を推進します～

庄戸小ホームページ <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shodo>



始まりは、担任の先生との対話から

校長 黒木 健

今月の学校だよりは、私の中高生時代の不登校経験からの話です。私は、中学校2年生から高校1年生の終わり頃までのおよそ3年間、学校に行けない時期がありました。今考えてみると、いじめや学習面での不安など、様々な理由が考えられますが、その時にはとにかく学校に行く気力が、そして勇気が湧いてこなかったのです。学級の中でもほとんど目立たない存在であった私は、そうした自分にとっての負い目からか、休み時間などでも友達と交わることも少なく、教室でただ一人、本を読んだり何となく学校の中を歩いてみたりと、そんな中学校生活を送っていました。特に運動が得意でもなく、ましてや学級をまとめるリーダーシップがあったわけでもなく、体育祭や文化祭などの学校行事にもあまり貢献できなかった自分を、今でも思い出すことができます。自分でも「このままではいけない。何とか今の状況から抜け出さなくては。」と、何度も自分に言い聞かせてはみましたが、なかなか変化は起こらず、ただ時間だけが過ぎていきました。

中学校を卒業して高校へ進学してからも、最初のうちは、中学校時代と同じような状況が続きました。しかし、そんな私にもやっと遅い転機が訪れました。そのきっかけをつくってくれたのは、1年生当時の担任の先生でした。その先生は、英語がご専門で、放課後に補習と言っては、気持ちの定まらない私を職員室奥のテーブルに呼び出し、英文法や長文読解などを丁寧に指導してくださいました。今考えてみると、そこでの先生との対話を通じて、少しずつ自分を、そして自分らしさを形づくっていくことができたような気がしています。また、それに加え、英語という教科に強い興味を抱き、大学に進学してもっと英語を専門的に学んでみたいと、自分の人生で初めて明確な目標をもつことができるようになったのも、この頃であったと思います。明確な目標ができると、人生は突然滑らかに、そして今までの人生で経験したことのないような速いスピードで一気に流れ出しました。今までに流れたくても流れられなかった想いを吹き飛ばすかのように、その流れは支流から本流へとつながって、そして力強い流れへと変わっていきました。

ある程度の年齢になってからようやく、中高生の頃の自分を冷静に振り返ることができるようになりました。そこでまず感じたのは、その時に不安に感じていたことをどうやって解決していくのか、もっと前向きに考えるべきであったという反省であり、また不安に感じた時にこそ、まずは行動に移してみるべきであったという後悔の念でした。このおよそ3年の間、学校に登校したりしなかったり、また、遅刻したり早退したりを繰り返しながら、何とかその苦しい時代を乗り越えてきました。もし自分が普通に学校に通えていたら、どんな現在の自分があるのだろうと考えることがあります。そうであったのなら、少しは不得意科目も減らせることができたのかもしれませんが、また、他者との関わりももっと上手になっていたのかもしれませんが。これらの経験から今、私が子どもたちに伝えたいことは、「学校との関わり方は必ずしも一律である必要はなく、子どもそれぞれでよいのではないか。」ということです。私が中高生であった二昔前とは大きく異なり、そうした認識は学校関係者にはもちろんのこと、社会にも既に広く浸透した考え方となっているはずだからです。今改めて、子ども一人ひとりが自分らしく過ごせる学校の在り方をこれからも模索し続けていきたいと、この「学校だより」を執筆しながら感じているところです。